新　刊

□清水晶子（著）・大場秀章（監）：**絵でわかる植物の世界**　168 pp. 2004. ¥2,000. 講談社. ISBN: 4-06-154754-2.

自然観察の際最も目に触れる機会の多い顕花植物について，分類学的・形態学的な事柄を教えようとするとき，どうもうまい教科書がない．「植物学」の教科書では系統学的観点から顕花植物はほんの片隅に押しやられ，おまけに生命に共通な物質生物学的な話題ばかりが強調されている．高校出の学生はいかに自然が好きであっても，花や葉を手にとって観察する授業を受けていないから，どこに目をつければ観察できるのか知らない．植物観察は名前がわかれば終わり，という認識である．本書は，そういう人達がそこらの野外で出会う植物をどう見るかについて，参考にしてもらうのに適当だと思う．

1. 植物のかたち，2. 植物の生活，3. 植物の生殖，4. 植物の分類の 4章より成り，です・ます調の文章と85の模式的な絵と16枚の図鑑的植物画が挿入されている．一見したところ文より絵の方が多いくらいに感じる．写真は一枚もないが，これはこれで一つの行き方と思う．というのは，写真は細大もらさず写っている反面，予備知識がない者が見ると，どこが見るべき対象か気がつかないことがあるのだ．絵だと見せたいところを強調したりデフォルムしたりすることができる．

形態的なことが主題となっているが，2章では光合成や運動の仕組みが説明されると共に，他のところでも形態や構造と生理生化学的な仕組みとの関連が述べられている．4章ではいくつかの大きな科をとりあげて，特徴をわかりやすく解説する一方，最近のＤＮＡ研究による分類体系の見直しについても一言されている．一般向きの他書にはあまり見かけない「タイプ標本とハーバリウム」という見出しもある．記述はすべてアッサリしたもので，教科書的な精細さには欠けるけれど，自然観察に興味を持ちはじめた人達の目を肥えさせるための参考書として有用と思う．

巻末の事項索引を見ていて，もっと説明してほしいいくつかのことがらに気づいた．たとえば散布体と散布の仕組み，花粉の形と送粉，つると巻きひげと付着根とつる植物，八重咲き，裸芽と鱗芽などである．植物が好きだという学生でも，花粉は花粉症のもとになる粉としか認識していない人が少なくない．カキの種子は写生図がほしい．カキの果実の中に種子があることを知らない者がいるほどだから (果物屋で買うので)，その種子の中がどうなっているかを知っている人はほとんどいないのである．　（金井弘夫）

□小松かつ子，Batkhuu J., Sanchir Ch. (編)：**モンゴル国有用植物図鑑**　247 pp. 2003. モンゴル国有用植物図鑑ワーキンググループ（モンゴル国自然環境省，日本国国際協力事業団）．ウランバートル．ISBN: 99929-0-146-2.

本書は，上記のワーキンググループの共同プロジェクトとして刊行された植物図鑑である．同書の「はじめに」によると，モンゴルには3000種近くの高等植物が生育し，そのうちの1000種以上が有用植物とのことである．本書ではそのうちの277種を選び，学名，和名，モンゴル名（モンゴル文字及びアルファベット表記），チベット名（アルファベット表記）を挙げ，カラー写真を掲載して，形態，花期，分布，「植生」(生育地を指している)，薬効などが日本語で解説されている．執筆者としては小松かつ子氏，J. Batkhuu 氏，B. Boldsaikhan 氏，伏見裕利氏らの名前が並び，協力者としてモンゴルと日本の数多くの研究者の名前が挙げられている．

カラー写真は植物体の全形を示す生態写真と花部のアップ写真が掲載されている．これが，紙質が良好なことと相俟って，素晴らしい出来映えである．中には不鮮明なものもあることはあるが，短期間で仕上げなくてはならなかったとのことで，花にはシーズンがあるため，やむを得ないものと思われる．評者のように本書を Florsitic manual ととらえる立場からは，記載文に加えて鮮明な写真が貼付されている本書はモンゴルのフロラの理解に役に立つと思う．

入手方法について国際協力事業団（JICA）に問い合わせてみたが，残念ながら，現在の